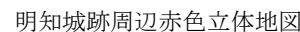


東美濃の在地領主である遠山氏のなかでも明知遠山氏と呼ばれる支流です。遠山氏は16世紀中葉には武田方について活動していましたが、1572年に織田方に鞍替えしました。同年武田氏との合戦（上村合戦）において明知遠山氏の当主景行が討死し、跡を継いだ利景も織田方につきました。1574年には武田勝頼の攻撃を受けて明知城は落城しました。本能寺の変後の清須会議の結果、利景は織田信孝に服属しました。翌年の賤ヶ岳の合戦、さらに翌年の小牧・長久手の合戦に伴う戦乱で羽柴方と敵対した利景は森氏に明知城を追われ家康を頼りました。

1614年に利景が死去し方景(みちかげ)が跡を継ぎ、大坂の陣に従軍しました。1615年頃から参勤交代を始め、江戸と領地の明知を往復する旗本、交代寄合として活動していました。1678年に家督を継いだ伊清(これきよ)は幼年であったため参勤交代をやめ、以後明知遠山氏は江戸に常住します。



【周辺の交通】明知城は中馬街道（根羽村一名古屋）と南北街道（中山道大井宿—岡崎）の交差点を押さえる小高い山（比高85m）に築かれています。中馬街道は中世と近世では明知城付近の道筋が異なり、図の破線部分が中世の道筋でした。

【周辺の城跡】南には谷(万ヶ洞)を挟んで仲深山砦、南東には市街地を挟んで落合山砦が築かれており、合わせて交通の要衝を守る一体の城と捉えることもできます。仲深山砦跡は明知城跡と共通する畝状堅堀群と横堀の組み合わせが見られ、明知城跡の成り立ちを考える上で重要な城跡です。

本調査においては、明智町の皆様には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。



恵那市公式キャラクター「エーナ」

西暦	出来事
1509	遠山景行、生まれる
1551	明知城の史料上の初見
1555	岩村衆と阿摺衆が明知で合戦 この頃、遠山氏は武田方に従属
1572	遠山氏、織田方に寝返る
同年	遠山景行、上村合戦で討死
1574	武田勝頼、明知城・串原城を攻略
1582	森長可、東濃攻略を開始
1583	遠山利景、森長可に降伏
同年	利景、長可から離反し三河に退去
1584	遠山氏、小牧長久手の戦いに伴い、 徳川方につき明知城・岩村城を攻略 和睦後に再び三河に退去 明知城は森氏の支城となる
1600	利景、関ヶ原の戦いに伴い、 徳川方につき明知城を攻略
1601	利景、旧領を安堵される
1614	利景死去、方景が跡を継ぐ
1614・15	方景、大坂の陣に従軍 このころから参勤交代を始める
1635	参勤交代が制度化
1678	遠山伊清が4歳で家督相続。 幼少により参勤交代をやめ定府となる

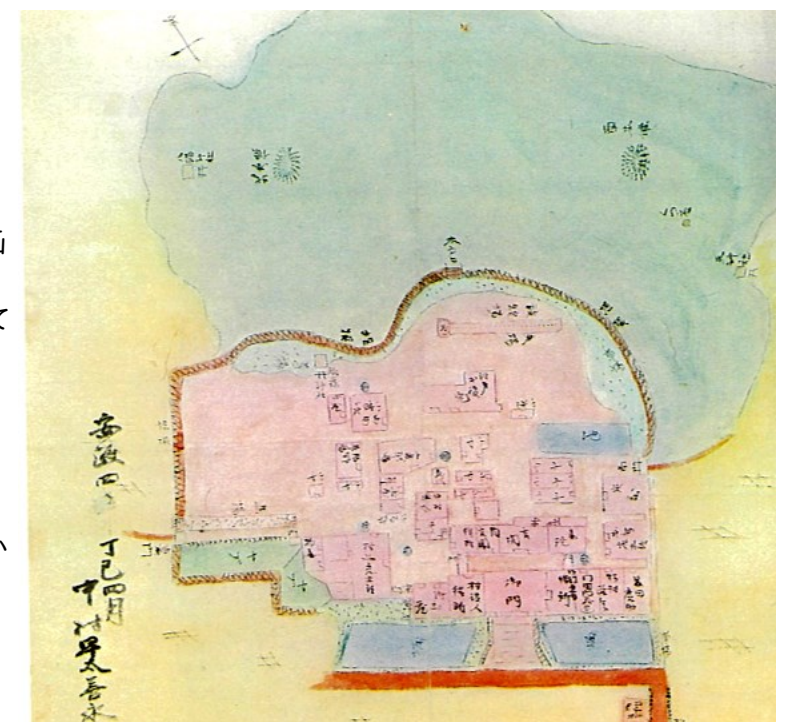
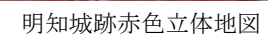
【曲輪】山の尾根や斜面を削ったり、土で盛ったりして造った平坦地。【横堀】曲輪の周りに沿って設けた堀。【竖堀】山の斜面に沿って縦に設けた堀で、斜面での横移動を防ぎました。【畝状竖堀群】竖堀を横に連続して並べたもの。【堀切】尾根伝いで侵入を防ぐため、尾根を断ち切った堀。

令和7年1月11日 恵那市教育委員会

恵那市では国史跡指定を目指した総合調査を進めており、今年度は明知城跡で初めてとなる発掘調査を実施しました。

明知城跡は岐阜県内でも屈指の規模を誇る山城でありながら、明智町の市街地に隣接し、アクセスが容易な山城でもあります。

また、1857年の「明知陣屋絵図」には明知城本丸が「北本條」、出丸が「南本條」として記されています。



安政四年 明知陣屋絵図

○発掘調査成果

今回の発掘調査では本丸の変遷について大きな成果が得られました。

○発掘調査で明らかになったこと

①16世紀中葉に初めて山城が築かれたこと

当時の明知遠山家の当主は遠山景行(かげゆき)であることから、築城者は景行と考えられます。

②関ヶ原の合戦後、本領に復帰した遠山利景(としかげ)は本丸を大改修して御殿を建て、そこにいったこと

明知遠山氏は本領に復帰後は山麓に陣屋を構えたと考えられていましたが、今回の調査で、復帰後は明知城を大改修して、御殿を建て、そこに居住したことが判明しました。

③本丸の御殿が麓に移った後も、本丸は祭祀の場(社、祠、墓等)として、17世紀中葉まで利用した

本丸御殿の存続時期は20年ほどと考えられます。その後は明知遠山氏による祭祀の場として利用されました。

○石臼

挽臼の上臼と考えられます。

側面の穴は挽手を差し込んだ箇所、右半分の欠けた部分には供給口と思われる穴の痕が確認できます。



○集石遺構(3期)

祭祀の場(社・祠・墓等)と考えられる集石遺構が検出されました。出土遺物から17世紀と考えられます。黄瀬戸鉢の陶片に加え、集石遺構の周囲からは銅銭、和釘、水晶なども出土しています。

遺構が廃絶したと考えられる時期は明知遠山氏が参勤交代を止めて江戸に常住し始めた時期と重なります。



○本丸の変遷

【1期】掘立柱建物の建てられていた時期です。出土遺物から16世紀中葉以降と考えられます。

【2期】礎石建物が建てられた時期です。出土遺物から17世紀初頭以降と考えられます。

【3期】祭祀の場として使用されたと考えられる時期です。出土遺物から17世紀中葉までの時期と考えられます。

○中井均(なかい ひとし)氏のコメント

(滋賀県立大学名誉教授、恵那市明知城跡調査検討委員会委員長)

明知遠山氏という戦国時代の在地領主が、1600年の関ヶ原の合戦後、旧地に領主として戻り山城を改修して居住していたが、寛永年間(1624~1644)に幕藩体制の成立とともに旗本となり、城を廃して陣屋に移り住んだことが発掘により明らかになった。近世初頭の在地領主居城の歴史的変遷を窺うことのできる稀有な遺跡といえる。

○ピット(1期)

柱、あるいは柵の建てられていた穴です。

写真のピットは下層面から掘り込まれており、1期に属するものです。また、同ピットからは墨書かわらけが出土しました。



○礎石(2期)

17世紀初頭に建てられた御殿の礎石と考えられます。

礎石を据え付けるための穴(掘方)はなく、盛土と同時に据えられたと考えられます。

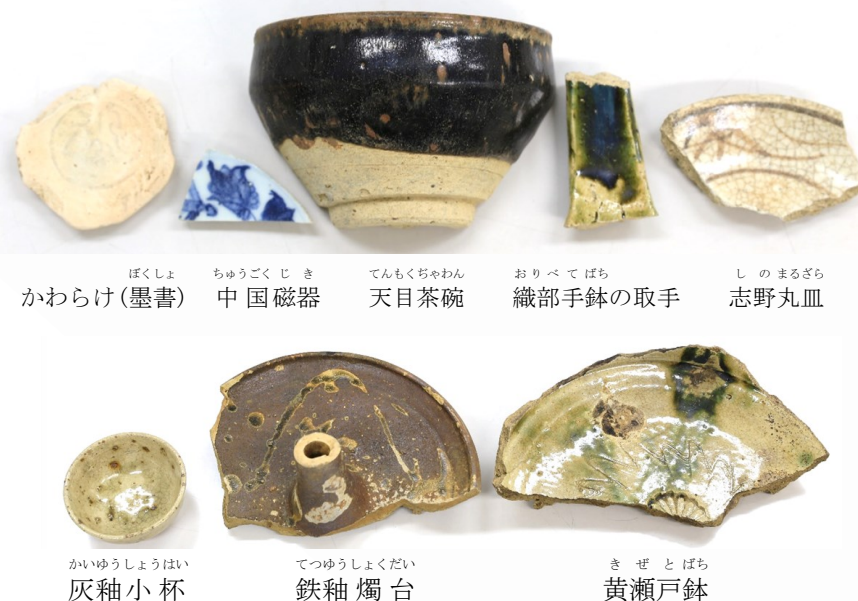


○約350点の遺物が出土

かわらけ(素焼きの皿)、瀬戸美濃産陶器(天目茶碗、播鉢、小杯、織部手鉢の取手、黄瀬戸鉢、燭台)、中国磁器、基石、水晶、鉄製品(和釘、火打鎌)、銅銭などが出土しました。

墨書かわらけは本丸造成の地鎮に伴う可能性があります。

陶器の大部分は美濃窯で生産されたものです。出土遺物の年代から3時期の変遷が明らかになりました。



○土層模式図

層3と層4の上面が1期に造成された下層面に当たります。

層2と層1の上面が2期に造成された上層面に当たります。

集石遺構の中には土壌を伴うものがあり、地山まで掘り込まれていました。

